

2016年度 第13回ジェンダー史学会年次大会

自由論題報告要旨一覧

部会 A

◆佐藤繭香（麗澤大学）

戦間期の大英帝国博覧会にみられる女性表象

1924年と25年にロンドンのウェンブリーで大英帝国博覧会が開催された。1938年には、スコットランドのグラスゴーで開かれている。1920年代の始め、大英帝国は全世界の陸地の約四分の一となった。その一方で、帝国は分裂の危機にあった。1922年にはアイルランド自由国が成立し、インドやエジプトではナショナリズムの動きが強くなり、自治領は、自治権の拡大を求めている。そうした動きのなかで、イギリスは、大英帝国博覧会を計画し、帝国のなかの宗主国としての地位を確立しようとしていた。

1924年、25年の大英帝国博覧会では、ロンドンのウェンブリーの216エーカーの土地に、自治領や植民地のパビリオンが建設され、大英帝国の「結束」のため、協力することが求められた。他には、工学、産業、芸術の殿堂といった建物やキヨスク、庭、5つのレストラン、28のカフェ、小さな教会や宗教関係の建物、そして遊園地があった。王太子は、「帝国の歴史の生きた絵とその現在の構造」を見せることだと宣言しているが、大英帝国博覧会は、大英帝国の偉大な姿を視覚的に提示し、結束力を強めることであったといえる。

大英帝国博覧会に関する様々な研究はあるが、それらは植民地や自治領が博覧会のなかでどのように表象され、博覧会が人々に帝国について教育を施す格好の場であったことを明らかにしている。しかし、それだけでなく、博覧会は、帝国についてだけでなく、人種や階級、ジェンダーについても教育を施すことのできる場であった。

女性が博覧会で活躍する姿をみせることは、女性の社会進出の証としてみなされるが多かった。歴史家グリーンハルは、『つかの間の景色』（1988）のなかで、国際博覧会は、女性たちが父権に対する不満を表明する最初の最も有効な文化的な場であったと述べている。大英帝国博覧会でも女性たちは、積極的に活躍した。国際女性評議会は、1924年の大英帝国博覧会に関わり、博覧会に女性部門を設置することを提案した。それによって、女性週間などを企画し、健康、教育や家庭生活など女性に関わる問題について議論できる政治空間を提供した。

女性の社会進出が示される一方で、博覧会では、女性の伝統的な役割も強調された。女性らしさや妻としての役割が、帝国を支える女性の理想像とされたのである。特に女性の美しさといったものが強調された。それは、イギリスを大英帝国の母国として、他の国々よりも文明化された優れた点を表すものとして、意図的ではないにせよ、イギリス女性

の表象は作用したのではないか。世界的な不況と戦争が間近にせまった 1938 年の大英帝国博覧会で、イギリス女性はどのように表象されたのかもあわせてみていく。

◆足立広明（奈良大学）

テクラ再考：古代末期の女性とジェンダー規範の変容

女性聖人テクラは 2 世紀ごろ執筆と推定される聖書外典『パウロとテクラの行伝』の主人公としてよく知られる。実母と婚約者を捨てて使徒パウロと旅立ち、やがてパウロからも離れて、女性支持者の見守る中、自らに洗礼を授けるその姿は、古代における女性の自立の可能性を示すものとして、80 年代以降のフェミニスト研究者によって注目されてきた (S.Davies, V. Burrus, D.R.MacDonald, R.S. Kraemer etc.)。

しかし、90 年代以降になると言語論的転回の影響などにより、こうした見解に対して強い疑問が提起されるようになった。たとえば、K. Cooper は、『テクラ行伝』は異教の世俗的モラルに対するキリスト教の禁欲的モラルの優越を描くものであるとした。また、80 年代に古代末期の修道女性たちの自立を高く評価した E.Clark も、こうした女性聖人の伝記にはパターン化した文化的類型を確認しうるのみであると唱えるようになった。

こうした見方には個別の反論は可能であるが、当時の記述史料が父権的な文化的枠組みの中で、男性作家の手によって生産・継承されてきた事実は注意する必要がある。父権的な規範意識の支配する史料に当時の女性たちの実像を見出すには、どうすればいいのだろうか。それとも、そのような作業は不可能なのであろうか。

Susan E. Hylen は、2015 年の著書 *A Modest Apostle: Thecla and the History of Women in the Early Church* のなかで、言語論的転回以降の研究、とくに文化的 Agency の概念を用いて 80 年代の研究を批判しつつ、むしろ女性の社会的活動の範囲をより大きく、広く、持続的なものとして捉えなおし、その中にテクラ行伝とそれ以降のテクラ崇敬を位置づけようとしている。

彼女によれば、これまでの研究者は『行伝』のテクラの自律性と、女性の「おしゃべり」や「歩き回り」を叱責するテモテ書簡に代表される「正統」信仰の父権的な倫理を二項対立的に捉え過ぎていた。しかし、「貞節」や「謙譲」などの美德を通じて女性が社会的権威を上昇させることを認める点では両者とも一致しているのであり、テモテ書簡の倫理を受け入れる既婚女性を多く含む女性信徒集団が、テクラ的な独身禁欲女性を賞賛することは矛盾しないと考えるのである。ローマ世界で女性たちの果たした社会的役割を考えたときも、女性たちは父権的秩序の下で制限されつつも、貞節や謙譲の美德の持ち主であると認定されることで公的舞台上に姿を現し、社会的に大きな影響力をふるうことが可能であった。Hylen はこうしたローマ世界の幅広い史的文脈のなかに両史料を置いて再読し、テクラが 2 世紀の『行伝』当時だけでなく、後代においても一般信者から支持されてその力を失わなかった理由を明確にしている。

Hysten の研究は、近年のローマおよび古代末期女性史研究の新しい潮流を踏まえたもので、大きな可能性の扉を開いたと思われるが、既婚女性と独身で禁欲修行を行う女性との差異は何であるのか、その点がなお明確でない。古代末期にはテクラのように独身で禁欲修行を行う女性が貞節や謙讓の美德の持ち主として賞賛され、社会上昇を遂げる事例が数多く見られるが、それはキリスト教に限定されず、「異」教の女性哲学者とされるヒュパティアなどにも明らかな共通点を見出すことができる。本発表では、宗教を横断して成長する古代末期の禁欲的独身女性の社会上昇の意味について、現段階での見通しを示してみたい。

◆成原有貴（青山学院女子短期大学）

「当麻曼荼羅縁起絵巻」における女性表象の意味と機能

当麻曼荼羅は、阿弥陀仏の極楽浄土のさまを表した織物で、8世紀に横佩大臣の娘が出家し、化尼（阿弥陀の化身）や化女（観音の化身）とともに蓮糸で織り、これを礼拝して往生したとの伝説を持つ。「当麻曼荼羅縁起絵巻」（光明寺蔵。以下、本絵巻）は、この伝説を描いた絵巻（全2巻）である。制作時期は、詞書書風や絵の様式から13世紀中頃と推定されるが、制作事情は、関連史料が現存せず未詳である。

先行研究では、本絵巻最終段の本願尼の往生が注目され、往生を願う高貴な女性が自身を主人公に準え、当麻寺に奉納するため制作を発願したと推定されてきた。つまり、絵の中の女性と実体の女性とが結び付けられ、制作主体が推定されたのである。

しかし、本発表では、従来とは異なる視点から本絵巻の女性表象を捉え、その意味を、絵巻の制作事情と関連付けて考察する。この考察をなす理由は、2014年の拙稿（『美術史』176所収）において、絵巻は当麻寺への奉納を目的としたものではなく、当麻曼荼羅を13・14世紀に盛んに流布した浄土宗西山派により、布教のために作られたとの結論に至ったからである。その主な根拠は次の2点である。①本絵巻下巻第2段・3段の建物内部には当麻曼荼羅が懸架され、本願尼が礼拝するが、これらの建物はいずれも、構造や建築要素からみて当麻寺の曼荼羅堂ではなく、邸宅内の私的信仰空間として描かれている。②当時の諸史料には、西山派が当麻寺での曼荼羅宣揚と同時に、京の院や貴族の邸宅で当麻曼荼羅の転写本を用いて曼荼羅講説（絵解き）を行ったとの記録があり、後者の京での布教のあり方は、下巻に描かれた私的空間での曼荼羅信仰の様相と合致する。以上の新たな可能性のなかで、女性表象の意味もまた、改めて検討する余地が生まれたのである。

そこで、本絵巻の女性表象を、ほぼ同時代の作で同主題を描いた掛幅「当麻曼荼羅縁起絵」（当麻寺蔵。以下、掛幅本）の女性表象と比較したところ、絵巻と掛幅本が以下の二点で対照をなすことがわかった。第一は、曼荼羅を礼拝し往生する本願尼の様態である。本絵巻下巻第2段・3段では、本願尼の髪は腰に達するほど長く、法衣ではなく墨染の袿をまとい、本来は在俗の女性が穿く緋色の袴を穿く。一方、掛幅本の本願尼は、完全剃髪の頭部

を露出し、法衣を着け、僧侶と同様である。つまり、同じ本願尼が、本絵巻では女性性を、掛幅本では男性性を有して描かれているのである。第二は、蓮糸の糸紡ぎや染糸の様子である。本絵巻上巻第2段・3段においてこれらの手仕事は、阿弥陀(化尼)が本願尼や侍女たちと協働して行う「奇瑞」として表現され、男性たちのみによる染糸の井戸の掘削などとは区別されている。女性たちによる手仕事の聖別は、掛幅本には看取されないものである。

以上に析出した対照は、当麻寺の特殊な組織事情と密接に関わるものと考えられる。中世の当麻寺では、中心的組織は真言宗と修験であり、浄土宗西山派は、寺での当麻曼荼羅顕揚事業に寺僧分として参加できたものの、基本的には周縁組織だったと指摘されている。そして、先の掛幅本は、当麻寺の真言・修験方の立場から制作されたことが近年明らかにされた。本絵巻の、本願尼の様態や手仕事の描かれ方をめぐる女性性の強調は、当麻寺での西山派の立場と連動するものであり、真言・修験方との差異化をはかるための表現として捉えることができよう。

部会 B

◆平塚博子（日本大学）

60年代アメリカにおけるメディアとジェンダー表象—『ライフ』誌が描いた「アメリカン・ウーマン」

1936年に創刊されたアメリカの写真週刊誌『ライフ』は、第二次世界大戦中から戦後を通じてアメリカでもっとも影響力のあるメディアの一つであったことは、疑いがないであろう。戦中から冷戦初期を通じて、アメリカ政府とメディアの結びつきは、世論だけでなくジェンダー規範や女性のイメージの形成において大きな役割を果たし、『ライフ』もその一翼を担ってきた。第2次世界大戦中は、深刻な労働力不足という問題を受けて、政府は従来男性領域とされてきた領域での女性の労働力の動員を図るべくメディアに戦時の新しい女性のイメージ作りを要請し、『ライフ』を含めて多くのメディアがそれに応じた。第二次世界大戦は、まさにアメリカ人女性の社会進出促すと同時に、アメリカ社会における伝統的な「女らしさ」の概念に修正を迫る契機となった。しかし、こうした女性の社会進出やジェンダー秩序の揺らぎはあくまで戦時という非常時の期間限定的なもので、戦争終結後アメリカ社会は伝統的なジェンダー規範に回帰する。そしてこの時期のメディアも、「女性の社会進出は一次的なものであり、戦争という非常時が終われば女性は家庭に戻る」という政府のプロパガンダを踏襲し、女性表象において母性や家庭性を強調するものが目立つようになる。一方で、戦中就労を経験したこと、さらに戦後の社会状況が変化したことなどから、アメリカの女性たちにとって戦後の伝統的なジェンダー規範への回帰は、矛盾に満ちたものにならざるを得ない。この時期の『ライフ』も、WASPで郊外の戸建てに暮らす中流家庭の妻や母を規範的な「アメリカン・ウーマン」として提示しつつ、時にWA

S P 中心主義的で伝統的な女性像の矛盾や裂け目を陰画的に映し出している。

『ライフ』においてこうした矛盾や裂け目がより鮮明に浮かび上がるのが、1960年代である。戦後の公民権運動の高まりやそれに呼応するかのよう高まるフェミニズムや対抗文化やベトナム反戦のうねりは、当然のことながら『ライフ』が描く女性像にも少なからぬ影響を与えていくこととなる。さらにこの時期はテレビという新しいメディアが、『ライフ』をはじめとする活字メディアを圧倒し始めた時期でもあり、『ライフ』は「アメリカの現実を映すメディア」としてのアイデンティティを問われた時期でもある。このような流れの中で、この時期の『ライフ』は、伝統的なジェンダー規範を踏襲しつつも、その一方でその矛盾と時代の変化を映し出しつつ、必然的により複雑で多様な「アメリカン・ウーマン」像を提示することとなる。本報告では、アメリカ社会が激動の時代を迎える60年代以降の『ライフ』に着目し、この時期の『ライフ』の表紙や記事におけるジェンダー表象を、40年代と50年代のそれと比較しつつ分析する。そうすることで、この時期の『ライフ』提示する「アメリカン・ウーマン」とはどのようなものであるかを明らかにしてみたい。

◆佐々木一恵（法政大学）

キリスト教（再）「男性化」の試みと福音としての〈科学〉・〈国際主義〉—20世紀初頭のアメリカ合衆国のプロテスタント海外宣教運動の事例から

本発表では、19世紀末から20世紀初頭におけるアメリカ合衆国のプロテスタント教会の（再）男性化の試みを、リベラル派を中心とする中国における海外宣教運動に焦点を当てて検討する。とりわけ、宣教運動に科学的合理主義や国際主義が取り入れられていく過程において、どのように民主主義という概念が、アメリカ国内外の多様性を包括する理念として鑄直されていったか、またそのジェンダー的を議論していく。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、イギリスやアメリカ合衆国では、キリスト教を（再）「男性化」する試みがみられた。アメリカ合衆国においては、急速に進展する都市化やカトリック系移民の急増、また「アメリカ病」とも呼ばれた神経衰弱症の蔓延などに不安を抱いたプロテスタントの白人中産階級の男性たちを中心に、「力強く男らしいタイプの宗教」の（再）構築を目指すリバイバル運動が展開された [Bederman 1989; Ladd and Mathisen 1999; Putney 2001]。こうした運動の参加者たちが問題視したのが、19世紀のアメリカ社会における「分離された領域 (separate spheres)」のジェンダー規範にもとづく、いわゆるキリスト教の「女性化 (feminization)」であった [Ann Douglas 1977]。彼らの多くは、社会進化論などの影響を受けながら、キリスト教の「女性化」によって、アメリカ合衆国のプロテスタンティズム、それに基づく文明、そしてこれらを支えてきたアングロ=サクソン人種が、自然淘汰の危機に陥ると憂慮した。「あまりに長きにわたり、宗教は女性の手に委ねられ続けた」との共通の認識のもと、彼らはキリスト教をマスキュリンで20世紀的なものへと鑄直す運動を推し進めていった。

本発表では、こうした男性中心の宗教リバイバル運動の担い手たちが、運動の目的遂行に有効な手段として取り入れた、法人資本主義 (cooperate capitalism) のビジネス手法と科学的国際主義 (scientific internationalism) の科学観に注目する。運動の参加者の多くにとって、自由放任主義経済における自生的な企業家資本主義 (entrepreneurial capitalism) と、それを裏側から支えてきたジェンダー的にコード化されたヴィクトリアン・プロテスタンティズムは、ともに時代遅れの遺物であった。株式会社と消費者を中心とする市場経済が台頭する新たな世紀において、企業における効率的かつ合理的な組織運営こそが、宗教を活力溢れるものへと再編させていくために最も有効であると考えた。また、彼らが目指す宗教のリノベーションを推し進めていくにあたり、「近代化」の牽引力であり、また世界のすべての人々の福祉と幸福の向上に平等に資する普遍的ツールである科学を取り込むことが重要であると考えた。

こうした資本主義的合理性と国際主義的科学概念を取り込みながら進められたアメリカ・プロテスタンティズムの (再) 男性化は、宗教の「公的領域」への (再) 接続の試みであったともいえる。こうした試みにおいて、アメリカ的な民主主義がどのように標榜され、またそれがアメリカ合衆国の対外政策とどのように結びつき、そしていかなるジェンダー的意味合いと効果をもたらしていったかを発表では考察していきたい。

◆ 臺丸谷美幸 (お茶の水女子大学)

日系アメリカ人女性による朝鮮戦争従軍経験と社会参入—ジェンダーとエスニシティの視座から

本報告は、アメリカ合衆国 (以下、アメリカ) 市民として、朝鮮戦争(1950-1953年)へ志願した、日系アメリカ人 (以下、日系人) の二世女性について論ずるものである。同時代の二世女性による軍隊への志願については、Brenda L. Moore による研究が代表的であり、これは、第二次世界大戦下の WAC(Women in Army Corps)に所属した二世女性に関する研究である (*Serving Our Country: Japanese American Women in the Military during World War II*. New Brunswick [NJ]: Rutgers Univ. Pr, 2003)。しかし、これはあくまでも第二次世界大戦期の研究であり、朝鮮戦争期への言及はない。この傾向は、二世男性の従軍を扱った先行研究にも共通にみられ、二世男性の場合、第二次世界大戦期下に結成された人種隔離部隊である、陸軍第442連隊や第100大隊などの、いわゆる「二世部隊」が議論の中心となってきた。二世男性は、朝鮮戦争期より通常の人種混成部隊へと編成されたため、朝鮮戦争期の正確な従軍者数は判明していない。しかし、国務省の発表と、報告者自身の調査を基にすれば、5000 から 6000 人程度の二世男性が朝鮮戦争時に従軍し、うち 2000 から 3000 人は朝鮮半島での戦闘経験があるとされる。さらに、僅かではあるが、二世女性が志願したケースも報告者の調査により明らかとなった。

本研究では特に 1948 年を起点とする、米軍における軍備再編の重要性に鑑み、朝鮮戦争

期の二世女性による従軍経験を、ジェンダーとエスニシティの視点から考察するに至った。1948年の軍備再編とは、すなわち、同年6月すべての人が「従軍時の平等な扱いと機会均等」が保障された大統領行政命令第9981号（the Executive Order 9981）と、同年同月の「女性の従軍に関する統合法」（The Women's Armed Services Integration Act of 1948）の議会法制定を指す。朝鮮戦争期の重要性は、第一に、当時の軍隊における日系二世の動員、統合は、二世男性だけでなく、志願した二世女性の従軍状況にまで及んでいたこと、そして第二に、朝鮮戦争期における従軍状況の大幅な変化には、第二次世界大戦の終結及び東西冷戦対立の始まりという、国際情勢の大きな変化という背景があったこと。つまり、「エスニック・マイノリティ」の軍隊における再配置は、1950年代当時の人種・エスニシティだけでなく、ジェンダーを巡るポリティクスによって決定されていたことが判明する。本研究の最終目標は、朝鮮戦争期へ志願した二世女性の考察を通して、1950年代当時のアメリカ国内で「エスニック・マイノリティ」とみなされていた人々が、正当な「アメリカ市民」として国家や社会に承認され、再配置される過程を検討することにある。

本報告では、①1950年代当時、日系人コミュニティにおいて、軍隊へ志願した二世女性はどのように評価されていたのか、②二世女性が志願することで、彼女たちの帰還後における生活や社会的立場はどのように変化したのか、について明らかにするため、二世女性の従軍経験者による自伝、調査者によるインタビュー調査・分析の他に、JAACL（日系市民協会）の機関誌である『パシフィック・シティズン』や、日系新聞である『羅府新報』などの記事分析を行い、当時の志願した二世女性に対する社会的評価と立場を探りたい。

部会 C

◆ 齊藤利彦（学習院大学）

高等女学校における「衛生」と身体への管理—「女子特別衛生」が意味したもの

近代学校への「衛生」の導入とその意味をめぐっては、これまでも多くの研究が蓄積されてきた。例えば、「衛生」という概念が疾病・伝染病対策のみならず、身体作法へのまなざしや、身体への管理の手法へと結びついたことについても論じられてきている。

男子の場合、富国強兵政策の観点から健康・虚弱問題が俎上に載せられ、兵式体操の実施や集団訓練の強化が実現していった。あるいは、近代医学に基く「衛生」の知見として、「正しい」姿勢や「正しい」慣習が可視的に措定され、それらが「校則」となって身体の所作を厳密に規定し制限することとなった。

さらには、「学生生徒身体ヲ検査シ其發育及健康ノ状態ヲ知悉スルハ衛生上忽ニスヘカサル」とする「学生生徒身体検査規定」（1897・明治30年）が、軍隊に続いて学校にも導入され、身体の各所が測定と統計の対象となり、標準値および比較・優劣が作り出されていった。

女子の場合では、どうであったろうか。むろん男子と共通する部分もあるが、女子の身体の特性に応じ、その管理の態様は男子とは大きく異なっていたことも明らかにされなければならない。

それを端的にあらわすものが、高等女学校における「女子特別衛生」の導入である。このことについては、従来の研究ではいまだ着目されてこなかったといつてよい。1900（明治33）年の文部省訓令第6号「女子師範学校高等女学校生徒心身發育上注意方」により、全国の高等女学校に導入されたものである。

具体的な態様として、女子の月経の認知と処置、さらには調査と申告による可視化と差異化を通して、いわば弱者・要庇護者としての自己像へと結びつけるものとなっていった。それらは、規範レベルでの良妻賢母主義とは異なり、女子たちの身体感覚や実感に基くものであったが故に、きわめて有効な身体意識への介入と統制の様相を現わすものとなった。

本報告では、新たに発掘した各地の高等女学校における「女子特別衛生」に関する資料、さらには当時の学校現場の実態を分析の対象として、女子の身体への「衛生」と「規範」による内面からの管理と統制の手法を析出したい。

◆程雅潔（奈良女子大学大学院博士課程）

『放足運動半月刊』にみる河南放足処の設立事情

キリスト教の人道主義の洗礼を受けた国民党の将軍である馮玉祥（1882-1948）は、河南省を統治した民国16年（1927）から17年（1928）の間、社会風俗の変革に取り組んだ。纏足解放についても、民国16年（1927）に彼の命令で河南省に放足処が創られ、官製の大々的な放足運動が始まった。ただし、この放足処の運動は9ヶ月間しか続かなかった。

放足処の活動期間は短かったが、纏足解放のために腐心したとはいえる。放足処が作成した宣伝物としては、『放足半月刊（全4期）』『放足画報（全6期）』『放足週刊（全15期）』『放足歌詞集』『放足戯劇集』があり、また、放足磅紙画報、放足宣伝大綱、婦女救星、放足方法、纏足痛歌、小張画報、放足問答、標語、宣言などのビラもあった。これらは全て配布物であるため、今はほとんど現存していない。ただし、その中の一つである『放足運動半月刊』（以下『半月刊』と略称）という小冊子が、第二期のみ陝西省図書館に所蔵されている。しかし、この資料の存在を知る人はほとんどいない。

『半月刊』は月二回の発行で、毎月16日が上半月の出版日に当たり、翌月1日が下半月の出版日であった。陝西省図書館所蔵の第二期は民国16年（1927）11月16日に出版されたもので、全72頁、放足に関する49篇の公文書などが収められている。その主な内容は、放足処の設立準備の民国16年（1927）9月から11月までの河南省政府が放足運動のために行った活動の記録である。この『半月刊』は毎月各県に20部、各機関に30部ずつに配布され、さらに各県の教育局の入り口にも貼られた。また、他省にも送付されたようであ

る。

この『半月刊』は今日から見れば、放足運動研究の一次資料として重要な意味を持っている。

民国 17 年 (1928) に河南放足処が活動を終えた 2 ヶ月後、放足処は放足運動に関する資料をまとめた『放足叢刊』を編纂出版した。この『放足叢刊』は全 456 頁に及ぶ大部の記録であり、影印本も出版されている。この『半月刊』を『放足叢刊』と比較対照したところ、『放足叢刊』に未収録の『半月刊』の資料が 23 篇あることが判明した。それらは主に放足処設立直前に作成された『放足宣伝大綱』や初代の放足処処長である薛篤弼 (1890—1973) の在任期間の活動記録である。例えば当時の職員名簿や一軒一軒への宣伝調査表 (二週間分)、さらに各県が行った放足運動の成果表などから、放足処の設立時の運動方針や実際の活動状況を明らかにすることができる。

本研究は『放足運動半月刊・第二期』をもとに、河南放足処の設立事情を考察するものである。

◆クロエ・ベレック (京都大学大学院博士課程)

20 世紀前半における薙刀教育の女性化

長い柄の先に反り返った長い刃をもつ薙刀は、中世においては僧兵と武士によってよく用いられた武器の一つであったが、江戸時代になると男女の稽古が行われるようになり、とりわけ武家の女子を対象とした教育道具となった。薙刀は武術流派の中では剣術や槍術の中の異種武器として考えられていた。薙刀には他の武器で使う技が組み込まれ、薙刀の稽古では木製の道具を使用した打突や、太刀対薙刀の組技の「形」を中心に行われた。

そして薙刀は 20 世紀初頭に学校教育に導入されると、その対象を女子だけに限定した。学校教育では、社会や文化における男や女に対する期待と規範が教えられ、体育の教育も「女らしい」「男らしい」という期待に沿いながら行われている。本研究では、女子師範学校、高等女学校、小学校などで使われた 20 世紀前半の薙刀教科書において、「女性らしさ」に対する社会の期待がどのように示されているかを明らかにする。

19 世紀末期から 20 世紀半ばまでに出版された薙刀教科書では、女性らしさや女性の優美さと、薙刀との関連性がよく述べられている。薙刀は武道であるが、女子に相当した活動とするために、薙刀の教育課程も女子に相応しいものにされた。そのため、柔道や剣道という男子の武道と比較して、薙刀の教育では試合ではなく、形の稽古が集中的に行われている。薙刀には中心部から外に向かって拡散したり、外側から中心部に向かって収束したりする「巴」という動きがあるが、これらの技術が稽古で用いられている。薙刀の持ち味である巴運動をしながら大きく薙ぐという技法を使うことで、薙刀は非力な女性の力でも十分に実行することが出来ると思われているのである。

また、学校での薙刀稽古の対象者が女子生徒であっても、学校では女子が将来の妻や母となるための教育が目指されており、個人としての人間形成よりも「婦徳の涵養」の方が強調された。将来の母となる女性の精神を涵養することは、国家の幸福と直接に繋がると考えられていたのである。19世紀末に成立した良妻賢母思想によって女性は、次世代に影響を及ぼす存在として認められ、女性が精神修養を行う目的は次世代に「武士道」を伝えることと考えられるようになった。つまり、「武士の精神」と言っても、女子教育において大切にされたのは、個人の精神の涵養ではなく、将来、妻や母となることを通して、家族に武士的精神を養うことであった。

20世紀前半に出版された21冊の薙刀教科書の中で、7冊に薙刀と関連する人物の記述がある。これらの教科書の中には、女性たちの名前だけが記載されたものもあれば、女性について語る長い文章を記述したものもある。圧倒的に多く書かれているのは、巴御前と板額御前である。その他に、真田伊豆守信之（信幸）の妻・神功皇后・春日局も多く登場している。薙刀の教科書では、貞節な態度で有名な女性の紹介が頻繁に行われ、そのことを通して道徳の涵養を行うことで、薙刀が女子向けの教育であることをアピールしていたと指摘できる。つまり、薙刀が女子に適した武道であることを正当化して、その薙刀に「女性らしさ」という特徴を入れ込み、薙刀を女子の物と定義したのである。

◆山家悠平（大手前大学）

遊廓を生き抜くマニュアルとしての『地獄の反逆者』（1929-30）

1926年という年は、遊廓のなかにいた女性たちにとって大きな変化の年であった。5月初めに警察が遊廓の待遇改善を目指すとして発表し、以後、門司、広島、弘前といった日本各地の遊廓で集団逃走やストライキが発生する。本報告では、『女人芸術』誌上に発表された元娼妓松村喬子（きょうこ）による小説『地獄の反逆者』を手掛かりに、その時期遊廓のなかにどのような変化が起きていたのか、そのなかで娼妓たちはどのように情報を集め、実際に行動したのかに迫りたい。松村は1926年に労働運動家の支援を受けて自由廃業し、のちに労働運動家になった人物で、これまで女性史研究では、遊廓を離れたあとの活動への言及はあっても、その作品はほとんど注目されてこなかった。

小説は主人公の歌子（松村自身）が、難波から名古屋中村遊廓の本家栄楼に引き抜かれてきたところからはじまる。しばらくして、歌子は、病弱のため楼主に冷遇されていた娼妓かるたの部屋を見舞いに訪れた。そのことを楼主にきつく咎められた歌子は、働いても借金が減らない稼業にも、楼主のやりかたにも強い反感を抱くようになる。その頃から、歌子は新高、川柳、小波などの楼内でも楼主に反抗的な娼妓たちと仲良くなり、次第にある決心を固めていく。一方、かるたは歌子との交流のなかで力を得、地元笹島署に出頭し病身のため稼業を休ませてほしいと訴えるが認められなかったため今度は楼の二階から飛び降り名古屋署に駆け込んだ。かるたがその際大けがをしたことで、楼は3ヶ月の営業停

止処分を受けるが、楼主はほとぼりが冷めるのを待って厄介者であるかるたを奈良の木辻遊廓に鞍替えさせてしまった。楼に残された歌子は、無念の思いを抱きながら、新高、川柳、小波とともに9月6日の夜更け、必死の逃走を決行する。

あまりにも反抗的でたくましいため「パルチザン」というニックネームつけられた小波や、一緒に逃走しようと約束していたにもかかわらず、歌子に告げずにこっそりと逃走し、結局失敗して連れ戻され反省する新高など魅力的な女性たちの群像劇としてのおもしろさに加えて、なによりも遊廓のなかを生きた当事者の経験を伝える記録という点が重要である。小説の記述をたよりに当時の新聞を調べた結果、かるたの警察への告発も、徳栄楼の営業停止処分もすべて新聞記事として残っていた。松村自身の逃走も、当時の『名古屋新聞』や『新愛知』で報道されている。逆にいうなら、記者の視点から書かれた記事では明らかにされることのなかった遊廓の内側の状況が、『地獄の反逆者』には当事者の立場から克明に描かれているのである。

そのような記録としての価値だけではなく、同時代的には『地獄の反逆者』は遊廓のなかの女性たちを読み手と想定して書かれた、一種の抵抗マニュアルでもあった。逃走時に注意することや、団結して楼主に抗議することで状況をかえられるということなど、遊廓を生き抜いた松村の経験が小説というわかりやすい形で表現されている。『女人芸術』(1929年7月号)には、松村の小説を読んだ娼妓からの投書が掲載されている。「姉さんのかいた本をお客さんからもらってよみました。ほんとうに本にかいてあるとうりです。あれをみていよいよ私もでるけっしんをしました。この次の本がでるのをまちどうしくおもいます」。遊廓のなかの「反逆者」たちにむけられた小説から浮かび上がるさまざまな抵抗の可能性をていねいにみてゆきたい。

部会 D (パネル報告)

- ◆石川照子 (大妻女子大学) 兼司会
- ◆藤井敦子 (立命館大学)
- ◆須藤瑞代 (関西大学)
- ◆姚毅 (東京大学)
- ◆山崎眞紀子 (日本大学)

一人の日本人女性記者が見た近代中国—竹中繁の「中国旅行日記」を中心として

1920年代の日本人は、中国に対して様々な意味で強い関心を抱いていた。中国の政治や革命の動向を注視し続け、日本教習の派遣や中国人留学生の受け入れを行い、また作家・画家たちの「支那趣味」も流行した。しかし日本の女性知識人たちの目は、中国ではなく、主として欧米の女性たちの動向に向けられていた。欧米の「先進的な」フェミニズムへの関心が高く、中国の女性に対する関心は相対的に低かったといえるだろう。

こうした中、日本の女性も中国の女性のことを知り、互いに交流するべきだと考えた女性たちも現れ始めた。本パネルは、1920年代から30年代にかけて、そうした活動の中心であった竹中繁（1875－1968）に焦点を当て、その活動を分析する。

竹中繁は東京朝日新聞初の女性記者であり、市川房枝をはじめとする日本の女性運動家たちとの関わりも深い人物である。彼女は1926－27年の半年間中国を旅行し、帰国後には中国を知るための会（一土会）を結成し、日中双方の新聞・雑誌に互いの女性の状況について寄稿するなど、国家間関係の悪化のさなかに、日中の女性同士の相互理解、連帯を目指した活動を行った。こうした活動を行った日本人女性ジャーナリストは、他に例をみない。

本パネルの報告者で構成する日中女性関係史研究会は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究(C) 研究課題「近代日中女性関係史におけるジェンダー構築の総合的研究——竹中繁を中心として」）の助成を受け、竹中繁の活動の重要性に着目し、竹中繁の遺族が保存していた大量の未公開資料（竹中繁の中国旅行日記や中国・日本の友人たちからの手紙類など）を丹念に読み解く作業を行ってきた。

その結果、竹中繁が大連、北京、天津、上海、香港など、沿岸部の都市を中心にまわった半年間の旅行中、ほぼ毎日記した「中国旅行日記」は、旅行の記録であると同時に、竹中が数多くの中国の女性たちと語り合い、互いに理解を深めた記録でもあることが明らかになった。旅行中に会った女性たちとは帰国後も手紙のやりとりがあり、竹中の遺品には数多くの書簡が残されている。これらもまた日中女性の交流を示す貴重な資料であることが分かった。

また、竹中は中国や中国人女性たちについての数多くの記事も執筆している。それによると、中国旅行に行く際、正直に言えば『突飛』と『軽佻』の一言でわりきられてみた支那の現代婦人を想像して」いたのだったというが、そうした想像は旅行の過程で覆され、帰国直後には中国の女性の「真面目な努力と奮闘と質実な歩みをつづけて行くところ」に、畏敬の念さえ抱くに至っている。その経験は、中国女性との交流・連帯への強い希望となり、竹中の活動の基盤となったのである。そして竹中は、悪化する日中関係を憂慮し、中国を侵略していく日本への批判に踏み込んだ発言を、次々に発表するにいたった。

本パネルは、日記、書簡や記事の分析を通して明らかになった竹中繁の活動とその意義について、五人の報告者がそれぞれ分担して報告する。まず、ジェンダー史研究から見た本研究の目的と意義について石川照子（大妻女子大学）が、続いて本研究の背景について日中関係を中心に藤井敦子（立命館大学）が、竹中繁の中国旅行の詳細や重要性について須藤瑞代（関西大学）が、中国女性との交流をめざした竹中の活動の意義について姚毅（東京大学）が報告し、最後に竹中日記の独自性について、ほぼ同時期に中国に旅行した与謝野晶子や芥川龍之介の旅行記などを踏まえて山崎真紀子（日本大学）が報告する予定である。